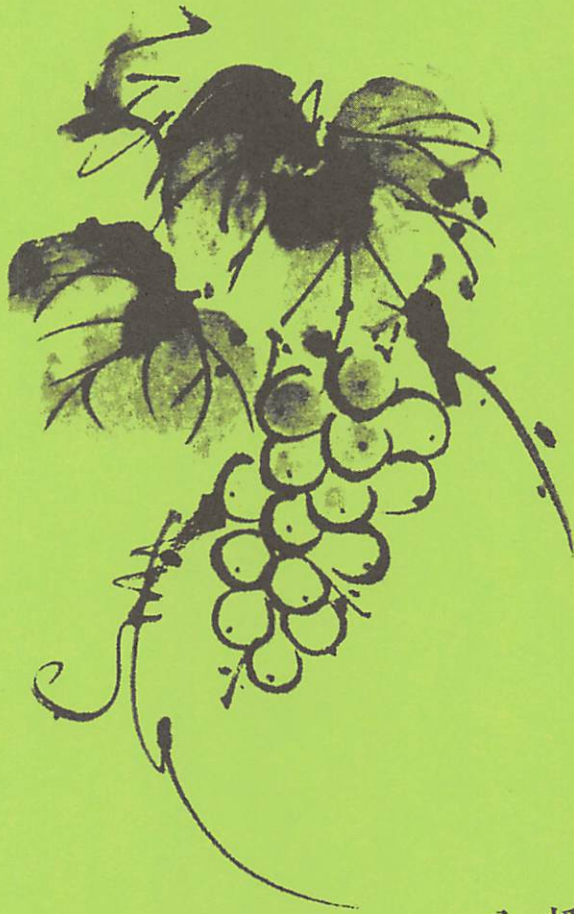


ぶどうの木

第 30 号



基督伝道隊

八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

目次

はじめに	榎本 和義 (大濠)	1	母・筑山なおの思い出	大口 和子 (前田)	25
信仰告白	上田 武士 (前田)	2	トルコ旅行記(パウロの足跡を辿って)		
信仰告白	金子 やよい (前田)	3		正野 真宏 (前田)	30
信仰告白	飯田 香 (前田)	4	我が思い出(移動編三)	鈴木 一幹 (前田)	34
信仰告白	淵田 桃代 (前田)	6	御言葉	緒方 とみ子 (大濠)	42
信仰告白	花田 敦子 (大濠)	7			
信仰告白	正野 聖美 (大濠)	9			
受洗十年目で新たな出発	貞 頼子 (大濠)	10			
朝の覚え	上野 米子 (大濠)	13			
恵みのとき	上野 米子 (大濠)	14			
おじいちゃんへ	小仲 拓也 (前田)	16			
神様に聞き従う	平野 博 (大濠)	17			
主人の病	正野 悠子 (大濠)	23			



はじめに

榎本 和義

「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ」。

イザヤ書 四三章一節

イエス様の救いとは、事情・境遇が世間並みに恵まれ、思いと願いがかなうことではありません。これまで自分が主人となり、生活全般を自分の所有としていたものを、神様の所有に移転することです。創世の初め、そもそも人は神様の所有であつたものですが、罪のゆえにその支配下に置かれ、本来帰属すべきところから失われていました。そのような私達を憐れんで、神様はひとり子、イエス様を世に遣わし、信じる者を再び神の子としてくださいました。不動産を売買すると、必ず、所有権移転を法務局に登録して、それが誰のものであるかを確定します。主の十字架はまさにこのことにほかなりません。失われた者を代価を払って買い戻し、これは私のものであることを主の血潮によって、血判を押してくださいさつたのです。今、主を信じて生きる私達は、神様のものとして生かされているのです。これこそが主の救いです。

ここに集められたあかしは、神様の所有とされた者の喜び・感謝・望みを語つたものです。これらのあかしの背後にあつて、常に生き働いて下さる神様の臨在を味わい、主の救いの確かさを感じて頂ければさいわいです。

また、多くの方々がこの救いにあずかつて、新しい命に生きるものとなつていただきたいと切に祈り、願うものです。

二〇〇三年 九月



信仰告白

上田 武士(前田)

私には子供が三人おりました。次男は九歳で事故死。長男は四十歳で病死。長女は四十歳で自殺と、遭い続く不幸に遭いました。何で神仏は、わたしにばかり不幸を押し付けるかと恨みました。子供二人はお寺に納骨していました。私は仏教徒だったのです。娘は学生の時からキリスト教徒でした。娘は私にお寺を止めてと懇願したことも度々ありました。この頃から少し心が動き、連れられて行ったのが、福岡市城南区梅林のエルシオン・チャペルで、淀橋教会の峯野牧師先生のお話でした。次に行ったのは、娘と親子三人で直方のバプテストキリスト教会でした。この頃から教会の雰囲気と素晴らしさがお寺と比べて、随分差のあることが分かってきました。だがお寺に愛する次男を納骨しているの、踏ん切りがつきません。それでもお寺のお勤めを果たしながら、夫婦別異教徒では私たちの老後の将来を考えた時に不安が残ります。

時々でしたが、前田教会に足を運ぶようになってから

おおよそ二年位になります。この間、私には車ごと海にダイビングして一命が助かったことがありました。これは毎日、家内が一人で家拝しているから神のお加護で救われたとのこと。私も実感しました。一年前、娘の自殺と云う不幸に見舞われました。これで私も決心がつかしました。夜、牧師館にお尋ねして、お許しを得ました。実はその前々日にお寺を引き払っていました。今は兄弟三人仲良く一つの壺に入り、教会の納骨堂に安置しております。娘が生前心配していた私が洗礼を受けることを一番喜んでいてはいないかと、今思います。

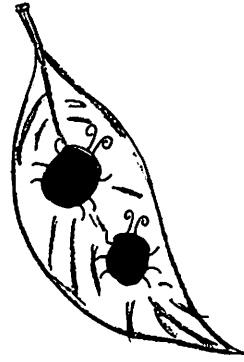
「あなたがたは鼻から息の出入りする人に、たよることをやめよ、このような者はなんの価値があるうか」。(イザヤ二章二二節)

人は何かを頼らなければ立つておれない弱い存在です。そのため、いろんなものを頼ります。まるで朝顔のつるのように。しかし、それはどれほどの力があるでしょうか。他人に失望する人も、自分には失望しません。神様は言われます。自分を含めて、すべて人を頼るな、神様に信頼せよと。二〇〇二年四月二四日の和義先生からのメッセージです。

ただただ感謝あるのみです。今日よりは主を信じ、聖書を信じて、キリスト教徒になることを宣言します。

創り主 主イエス・キリストの御名によって祈ります。
アアメン

(二〇〇二年一〇月一四日 受洗を前に)



信仰告白

金子 やよい(前田)

神様の深い御愛と皆様のお祈りによりまして、この度洗礼を受けさせていただくことを心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

『強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない』。(ヨシユア一章九節)

この御言は、私の心に深く、神様を信じて強くなり、信仰の道に入る決心が出来ました。それまでの私は、人を恐れ、自分の病気をのろい、夜も昼も、おののいておりました。

人を恐れるとわなにはまる。主を恐れよ。主の前に立ち返れ。むくいてくださるのは人ではなく、神様である。

三年前までの私はまるで悪魔に取りつかれたように、心も身も極限状態でした。

『すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう』。(マタイ一章二八節)

こんな罪深い私を神様は大きな御愛とあわれみをもって導いて下さり、神の子として下さり、たくさんのお恵みをいただきました。今は心もなごみ、身体の方も健康に向かつて、心より感謝の日々です。

榎本先生、和義先生、金生先生から、たくさんのお祈りの御言をいただき、お祈りもしていただきました。

神様を手ざわるように、知ること。

朝、目がさめたら、感謝のうちに祈りなさい。

すべてに感謝しなさい。

『あなたがたは心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい』。(ヨハネ一四章一節)

ややもすると、心騒がす、まだまだ信仰のにぶい私ですが、これからもたくさんのお祈りを胸にきざみ、主イエス・キリストのみむねにしたがって行きます。

神様の深い御愛に感謝いたします。アーメン。

(平成一四年一〇月八日 受洗を前に)



信仰告白

飯田 香(前田)

私は生まれたときから、母について教会へ行き、気付いたときには、祈ることも教会へ行くことも自然に生活の一部となっていました。しかしそのことは長い間、私にとつて嬉しいことではありませんでした。幼い頃は友だちと違うことが嫌で、教会へ行っていることを隠し、また、悩みのあるときは「神様助けてください」と祈っていたながら、自分や物事に成功したときに「神様に感謝しなさい」と言われることがたまらなく嫌でした。頑張ったのは私なのに、どうしていちばんは神様なのだろう…と本当に奢りの塊でした。いつも最善の道が備えられたのは、すべて神様の憐みによるものだというのに私はそのことを決して認めたくなかったのです。

親や人々から褒められる良い子でいたいと、人目ばかりを気にする私は、見かけのうえでは毎週、礼拝に出ていましたが、心の奥にはいつも神様に対する疑いと不満を抱えていました。大学生になり、青年会に参加するようになると、同じように若い皆さんが、はつきりと信仰をもち、神様に寄り頼んでいる姿が、羨ましくも不思議

であり、私にはとてもできないと不安にもなりました。さらに、同じように育ったはずの姉が受洗すると、焦りまで加わったのです。私も信じたい、「神様、どうかあなたを心から信じていることができるようにして下さい。」と祈る日々もありましたが、理屈っぽい私は、自分の頭で、自分の物差しで理解しようと試み、「心から信じているまでは受洗しない。」と大きな壁をつくっていたのだと思います。

神様から離れることは怖いけれど、心のどこかで神様を否定しながら生きていく、そんな罪深い私を、それでも神様は限りない愛で育ててください、将来の目標も、充実した学生生活も、希望どおりの仕事までも与えてくださいました。

重い障害を抱えながらも大きな使命をもって生き、様々なことを教えてくれる子どもたちとの毎日や、自分の無力さ、人間関係の難しさに悩む日々のなかで、神様のご計画というものを少しずつ考えるようになり、受洗についても考え始めました。

そのようななかで、一年間のカナダでの生活が与えられたのです。期待以上に不安が大きい生活で、私にできたことは祈ること、聖書を読むことだけでした。そし

て日本から届く手紙やEメールに添えられる聖言が大きな支えとなっていました。ホストファミリーや友人との関係、英語、仕事…すべてについて心から祈り求めました。すると自分でも驚くほどにすべてが与えられたのです。問題が生じてても、必ず解決されました。「これを神様の恵みと言うほかにどう説明できる？」と、疑う余地がありません。そう思った瞬間から不安は消えました。素晴らしい出会いに恵まれた一年でした。「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と神様が、約束して下さっている。もう何も心配する必要はありませんでした。

「私が成し遂げているんだ」と奢り高ぶっていた気持ちがいつのまにか「神様がまた与えて下さった」「神様が備えて下さるから大丈夫」と、不思議なほど素直に思うようになっていました。あれほど神様を信じたいと自分で願ってもどうにもならなかったのに、神様は私にとって最も良いときに、最も良い方法で、この心を開かせて下さり、むりにでなく、自然に受洗を決心させて下さったのです。

神様の御業を前にして、私はもう何ひとつ自分では成し遂げることができません。「神のなされることは皆そ

の時にかなって美しい」と、幼い頃、聖書の扉に書いてもらい、何となくその響きが好きで、身近に感じていた聖言が、今は本当に実感となりました。こんなにも小さく弱く、ひとりでは何もできない私を、守り育ててくださる神様に喜ばれる生き方ができるよう、ご計画のひとつひとつを感謝し、お従いしていききたいと思えます。

(二〇〇二年一〇月一二日 受洗を前に)



信仰告白

淵田 桃代(前田)

私が基督伝道隊 八幡前田教会の門を初めてくぐってから、一年が過ぎました。実を言えば、私がキリスト教会を訪れたのは、前田教会が初めてではありません。今

はもう亡くなった(亡くなったとは思いたくありませんが)父が長崎のカトリック信者だった親戚のお葬式に出席して、いたく感動して帰り、「信仰するなら、キリスト教にしなさい」と当時、未だ中学生だった私と姉に熱弁をふるっていたことがいつも心にあり、聖書の神様に、興味を持ち、近くのキリスト教会を捜しては、牧師先生や代表の方に質問したりしていました。イエス様がキリスト(メシア)であるということも、当時あまり理解はしていなかったのですが、でも不思議に聖書に書かれていることが真実であるということや、イエスというお方について行きさえすれば、きっと大丈夫だろうとは思っていました。

私は十代の頃、重い心の病の中にいました。過食症で胃が破れるほど食べたり、自分の体を傷つけたり、聖書にも悪霊につかれた人がでてきますが、それはまさに私の姿のような気がします。

聖書は真実だと分かっていたても、神様をあまり身近に考えることのできなかつた私でしたが、ある時、イザヤ書五三章を読むよう導かれました。三節には、「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた」、また四節には、「まことに彼はわれわれの病を負い、われわれ

れの悲しみをに「なつた」とあります。またヨハネの福音書には、涙を流されたイエス様のことが書かれてあります。それで、イエス様は、苦しみや痛みをも、わかつて下さるお方であること、私が苦しい時はイエス様も一緒に苦しんで下さり、痛みすらも理解して下さるお方であることを知りました。そしてそのお方が「わたしについてきなさい」と招いて下さっていることも。

この受洗の恵みにあずかる前に榎本和義先生とのお交わりの時間を与えていただいたことも感謝でした。ガラテヤ人への手紙二章一九〜二〇節「わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである」。

私もこのお言葉を告白できるように、いつも主により頼みつつ、歩んでいきたいと願っています。

(二〇〇二年一〇月九日 受洗を前に)

信仰告白

私は昭和一七年一月一日前原市白糸、白糸滝のふもとの農家の長女として生まれました。兄弟は年の離れた兄と二人です。その兄は私が二才の時戦争に行き、シベリヤに抑留され、私が小学校三年の時に帰って来ました。

それから両親と兄夫婦、その子供三人、八人家族に囲まれて大きく成りました。

私の家は仏教でして、その中でも禅宗でした。家族皆で仏様を一番大切に守っていました。神様も神棚にまつてありました。いつも父と一緒に参りし、お参りした後、父は悪いことをしなければ、この様にして、お正月と、お盆に参ればいと教えていました。私は悪い事はしません、と言



花田 敦子(大濠)

って参っておりました。

私の生まれ育ったこの地は、山と川と野に囲まれた、空気
のきれいな、水のおいしい、夜空の星のとってもきれいな所
でした。しかし、難点もありました。冬になると雪が降り積
もりました。又、小学校、中学校、高校と通学するのに片道
一時間半以上もかけて、通わなければならない所でした。

私は高校卒業と同時に農協に勤めていた頃、二三才の時花
田家に嫁いで参りました。

「大濠公園教会」で結婚式をあげさせて頂きました。その
後、花田の両親に連れられて、日曜礼拝に来る様になりました。
た。のんびりしている私は何も分からないまま、先生のみ言
葉を聞いていたように思います。

三才九ヶ月で二男を亡くした時は本当に悲しい思いでした。
先生を始め、教会の皆様にあいさされ、なぐさめられ、とてもや
さしくして頂きました。

昭和五二年八月、私達の家族は教会に近い磐固の地に住処
を与えられました。

そしてこの地で主人と商売を始めました。長男勉が十才で、
照二郎が一才八ヶ月でした。私は一生懸命働く主人のもとで、
足手まといにならない様について行きました。

この時期は神様から沢山のお祈りする時をあたえられまし

た。又沢山感謝する事が出来るように、なさしめて頂きました。
た。主人はあまり教会に来ませんでした。私が行ってきま
す、ただいま、と大きい声で呼んでいきますと、「オッ」と声を
出して答えてくれました。

今年三月に亡くなった主人のその声を聞くことも、答えも
ありません。

私は今から先、神様がこの地上にどれだけおいて下さるか
分かりませんが、天国のみくに入れて頂く時、「神様、有難
うございました。」と言える者になりたいのです。

自分の犯した罪がなんであるかも分らないような、おろか
な者であります。私を山の中からひきい出してください、
一方的に愛して下さい。神様を信じます。

(二〇〇二年九月二七日 洗礼式にて)



信仰告白

正野 聖美(大濠)

私は生まれた時から、教会に行っており、神様をずっと信じているつもりでした。そして、その事柄に大した不満も要求も無く、ただ淡々とした毎日を送っていました。

しかし、今まで歩んできた道を振り返ってみると、平々凡々としていたわけでもなく、自分にとっては小さい頃から苦勞し、悩んできたと思います。

まず、小さい頃から学校でのいじめにあい、しかし、その中にあっても「イエス様が居るから大丈夫」と心から信じていた時期もありました。また、少しずつ成長するにつれ、「神様なんか」という思いがどこかにあり、両親が信じているから、と他人事のように思えてなりませんでした。悩みの中にあつては祈り、それが叶えられると「ポイツ」と、まるで使い捨てのような信仰だったと思います。

さて、自分の事について少し触れてみますと、私は、普通に生まれてきた子ではないといつも親から聞かされておられ、生まれた日が三月三〇日なのですが、母親の胎外に出てくるのがあと二日程遅れていたら、死んでいたと。「だから、あなたは死んでいて当然のはずなのに、それを生かされ、この世

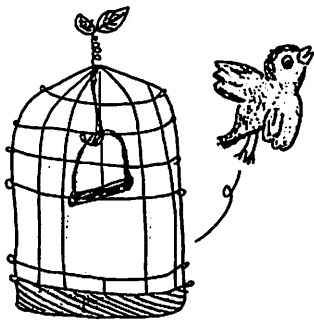
に生を受けたということは、きっと神様の何か御使命があるのよ」といつも言われていました。しかし、自分で自身を評価する時、何ひとつよいところはなく、しかも、使命だなんて…。初めにこれを聞いた時は、わりと目立たない子どもであつた私にとって、何か神秘的で嬉しくもあり、しかも「特別な子」と何か自負しているところがありました。そうやって、今までは親の信仰を自分勝手に使い分け、都合の良い時だけ信じるという、本当に身勝手な信仰であつたと思います。

また、なんといつても最大の悩みにぶちあたり、受洗を希望できたきっかけは、父の病氣でした。しかも、がんではないかと言う疑いもかかり、結果的にはそうではなかつたのですが、一番身近に何かあるということは、私にとって最大の心のピンチでした。毎日布団の中で泣きはらした事もありました。父親とどう接すればよいか分からなくなつた時もありました。しかし、神様は結果はどうであれ、その時々にあつて一番良い時に良い方法で事を成して下さいました。このことがなければ、家族も私達も、そして私自身に信仰の変化はなかつたと思います。

今まで幾度か「受洗をしたい、いやそうしなければ…」という思いがあつても、それを口に出すことはとてもはずかしかつた。そしてまず、親の言いなりになつたような、自分が

すべて変わらなければいけないような、何か堅苦しいイメージを持っていたからだと思います。しかし、自分で言うのもおかしなことですが、本当に小さい頃からつらく、苦しい道を通ってきた私にとって受洗をし、自分をさらけ出す事で重くのしかかっていた岩のようなものが、すつと下りたような気がします。受洗をした後も、私自身何も変わってないかもしれないません。いや、それ以上に見る限りはひどい生活、ひどい人生かもしれない。しかし、その中にあっても神様がいて下さるから大丈夫！そして、どんな事があっても真実なる、永遠に変わらない神様を信じていきたいと思えます。

(二〇〇二年九月二七日 洗礼式にて)



受洗十年目で新たな出発

貞 頼子(大濠)

まずは、先生方、教会員の皆様、そして両親。皆様のお祈りに支えられて私はなんとか今まで、道を逸れずに信仰生活を歩むことができたことを感謝いたします。

私は十年前、イエス様が私のために命を捨ててくださいたことを信じて洗礼を受けました。ひとつの節目にもう一度、イエス様に対する自分自身の言動を省みたいと思えます。

私は、決して熱心な信者とはいえない、主の前でも怠惰な私ですが、祈って決めました。それは、私がどんなに醜い者で、どんなに自分勝手であり、お恵みを頂かなくて当然の間であるということ。ゴミのように捨てられて当然の私ですが、こんな者をもイエス様はこんなにも愛してください。このことをひしひしと感ぜずにはいられない最近です。主の前においても正直に私自身の気持ちを感じたいと思えます。

社会生活のなか、私は非常に転職が多く、和義先生にもよくご心配をおかけしていましたが、それは私の心の中で、「自分はいつたい何をやりたいのか、何が私の取柄なのか…」そ

れを追い求めて外国に行ったり色々な仕事に挑戦したり、この年齢までにやらなければ…と一人で焦っている自分がいきました。しかし、よく考えるとそういうのは単なる我がままで、この世においては非常に幸せ者であり、ましてやこんな不況の中、大した実力もない自分が転々とし、希望していた仕事に就かせて頂いたこと自体、非常に恵まれている存在であること…。これは単に神様の哀れみとしかいいようがありません。

それともうひとつの恵みは、ずっとお祈りができるという環境におかれることです。転職する際には必ずといつていいほどお祈りをします。そのおかげで、普段読まない聖書を片手に必死になってイエス様と話をしました。どうなるのかわからない、先が見えないという状態でどうしようもない不安にさらされ、イエス様にしがみつこうと必死になること…。そして、新しい環境の中また祈り続ける…。しかし、私の行動をまとめると、自分勝手に行動する↓必死にお祈りをするが失敗して無力になる↓また必死にお祈りをする↓お恵みを頂いて感謝する↓慣れはじめて感謝を忘れる。これの繰り返しでした。なんと、調子のいい信仰生活でしょうか…。神様

に身を委ねていると言いつつも、自分の考えに従っていく。感謝をしていると言いつつも、すぐ忘れる。思い通りにいかないと何だか腹が立ってしまう…。私が何とかして行動しなければ何もはじまらない、とにかく私にはイエス様がついていけるのだから何でもできる。大きな勘違いをしていました。それは、自分の考えに基づく信仰であって、少しも安らぎはありませんでした。「重荷を負うているものはわたしのものにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」。色々な失敗で、気づきました。この御言葉がやっと自分の心に響きました。

「私は何もできません。イエス様なしでは生きていけません。私が考えていること、望んでいることは主の前で正しいことでしょうか？私にはわかりません。どうぞ教えてください。私を正しい道へ導いてください。全て主の御手に委ねさせてください」。肩の荷がすっと降りた感じでした。なんだか、全てのことを穏やかに考えられるようになりました。

今まで、病氣らしい病氣をしたことがない私でしたが、新たに問題が仲間入りしました。年甲斐もなく静脈疾患を起こし先天的に静脈壁が弱いのか、原因不明で年齢とともに病状も思わしくありません。今のところ、大事には至っていない

日常生活には特に差し支えないです。静脈を固定させないと足が痛くて疲れやすい、夏場は少々暑い、という程度で、大きな病気を負っている方に比べればほんの小さなかすり傷のようなものです。神様の与えてくださった事柄は本当に美しいです。神様にもっともつと寄りすがつて生きていくきっかけができました。感謝だと思えます。父も病気になるしました。

家族全員が、神様に寄りすがつていくことができました。私にとつて大好きな言葉ですが、「主が言われた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」。(コリント第二 一二章九〜一〇節)

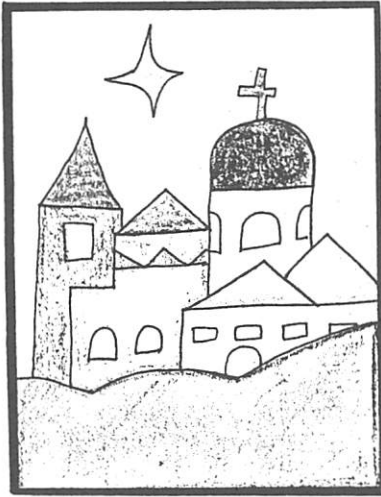
最近、ご礼拝での説教のお言葉が非常に胸に響くようになりました。今まで賛美歌の歌詞をしみじみ味わったことがなかった私でしたが、先日ご礼拝で歌った賛美歌二四〇番が心に響きわたり心の底から幸せになって涙ぐんでいる自分がい

ました。前はこの歌の節が好きでした。イエス様はずっと私の心の扉を叩いてくださっていたのに、私はまず自分を優先していたのだ。こんなにも愛されていたのに私はなんということをしていったのか……。受洗十年目でやっとイエス様の愛を心の底から感じ始めるようになりました。そして、それを心の底から感じ始めるとイエス様が私を愛してくださるように隣人を偽りなく愛したい……。と思うようになってきました。自分のことばかりお祈りしていた私ですが、主の前において偽りのない、心底から隣人のために密かにお祈りをする努力をしてみました。なんだか、とても気持ちがいいものだなー、としみじみ感じはじめています。まだまだイエス様の前で偽りなく心底に……。というのは程遠いですが、今後も試みたいと思います。

幼少のころは教会学校で、そして榎本利三郎先生のお説教で育ち、成人して和義先生のお説教で聖書、信仰のありかたを学んできました。先生方の堅い信仰心と熱心な姿を見続け、私自身、主を見上げて生きていく姿勢を持つ基礎ができた。と改めて感謝申し上げます。この教会の方々に囲まれ育てられ私は、本当によかった……。出会わせてくださった神様に

感謝で一杯です！

私の信仰生活はまた一から出直しです。まだまだ、失敗や経験が足りません。わからないことばかりですが一つ一つ主の御手であることを噛締めてどう転んでも感謝して生きていくことができたと願っています。そして、御言葉をもっと心にとめ、霊に満たされてただ主だけを見上げて世と闘っていきたい！この気持ちが変わらず道を反れることがありませんように……。皆様のお祈り、心から感謝しています。



朝の覚え

上野 米子(大濠)

聖名を崇めます。

今夏も盛夏の候となり、夏も本番となりました。このところ体力の衰えを覚え、今朝も「命は糧にまさり」「体は衣にまさらずや」と主のみことばを覚えました。外的な美味の食より、又美しき衣より、主よりいただきました内なる命、健康な体がどんなに大切か、又大いなる恵であるかを教えられました。

風におよぐサルスベリの小枝が所々に伸び、美しい薄紅の花をつけ、ルビーのようにかがやいてゆれております。青い大空には白い雲が色々な動物の形に画かれ美しく浮かんでおります。そして主はまた「我が恵汝に足れり」と語っておられます。主を覚えませ時、何一つ恵でないものはありません。造り主を通して語られている命のみことばは、生きて働き「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ四章六節)と語っておられます。

今朝、息子は「お母さん、大丈夫？」と言葉をくれました。

又、帰宅した息子は「今、帰ったよ」と告げます。私は「お

疲れさま、ご苦労様でした」と言葉返します。一つ屋根の下に生活を共にする息子と私の言葉の交換は、只一言ですが、それで通じます。母子の心とは有難いものですね。

つよい台風六号の訪れに心騒いだ三日間でした。余りの風をつよさに夜半そつと雨戸をあけ、庭を見ました。高く伸びた南天の木は大きくゆれて、その枝も折れんばかりです。サルスベリも体をふるわせ、ルビーを思わしめる花が散るのではないかと思ひ煩いました。

翌朝は台風もおさまり、小枝の先の花もしつかり幹につながり、緑の葉も清く洗われ、その美しさも色を増し加えておられます。花はしつかりと幹につながり、一片の花も地に落ちていません。「我はぶどうの木、汝はその枝なり。我を離れてはあなた方は何一つ出来ない。わたしにつながっていれば実を豊かに結ぶ」とぶどうの木を通して神の御旨を語っておられます。御真実なる神は御実体をもって私に迫ります。「我にしがえ」。風にそつて流れた枝は折れることなく命を保ちました。

わがたましいよ、主をほめよ

そのすべてのめぐみを心にとめよ

詩篇一〇三篇二節

大いなる恵を感謝して、今朝の連想をお捧げ致しました。

平成一二年八月一日

恵みのとき

尊き御聖名と御宝血を崇めて感謝申し上げます。

梅の花もほころび、小鳥のさえずりを耳にして早春の候を迎えました。旧冬の寒さいまだ去りやらず、朝夕の冷えを覚えます。私は昨秋より体調を崩し、弱きをおぼえていましたが、新年になって早々入院することになってしまいました。

一月六日の夜半を過ぎた頃、ベッドの脇に滑り落ちて立ち



上野 米子(大濠)

上がれず、家族の眠りを覚ましてはと思ひ、夜明けまで待ちました。待つと云う時は何と長いことでしょう。私の体はすっかり冷え切つて、骨の関節に痛みを覚えつつも立ち上がれずに横たわっていました。そのさまは轍に押しつぶされた蛙のようでした。家族が目覚まして、救急車で病院に運ばれ、二週間のベッド生活がはじまりました。この入院を通して主は私に何とおさとしくださいましたでしょうか。先ず、造り主を覚え、主の御愛を覚えました。そして私の天国でした。八十余年の生活の中で、目に光なく、耳に音なく、手に何の感触もなく、また、脳の働きもなく、全くの空白をいただきました。この空白は人の世の痛みと煩雜を取り去つて、私に安らぎを与えてくださいました。主はまどろむことなく、私の眠りを祝してくださいました。主は申されました、「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」と。

私達には過去もなく、未来もなく、只在るは「今」と云う時である。主は摂理を以つて目を覚まさしめ、被造物としての自覚を更に覚えさせてくださいました。

「われらは主の聖なるみ名に信頼するがゆえに、われらの心は主にあつて喜ぶ」。(詩篇三三篇二一節) 救われし者の幸

いを覚えます。そして一月半ばに完治ではございませんが、家庭での静養を申し渡され、日々祈りのうちに感謝する生活をもつて生かされております。

また、我が家族も命のみことばを通して、主の御旨を覚えしめ愛の労をとり、日夜臨んでいたわつていただいております。身近に起こる数々の試練は更に信仰の深みへと導いていただく大いなる主の恵みであることを覚えます。主は生きておられます。「力なき者の弱さを負え」と語りいただいております。自分の老いを省み、主の御手にゆだねて、「然り、然り」と答えて、家族の中においていただいております。感謝です。牧師先生のお祈り、兄弟姉妹の御加禱、家族のいたわり、全てが感謝です。そして最後になりましたが、主の御体なる教会をいただいていることは最高のお恵みです。

「あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである」。(イザヤ書四三章一〇節) この感銘深きことばは日々私に迫ります。

平成一三年二月二八日

おじいちゃんへ

小仲 拓也(前田)

喜寿、おめでとうございます。そして、いままで僕らを見守ってくれてありがとう。

僕が習字に行ったとき、必ずあたたかい笑顔でむかえてくれました。きついバスケの練習の後で、疲れて習字にきたときでも、「やるぞー!」というやる気をもらうことができました。こうして書道を続け、特待生になれたのも、おばあちゃんの指導に、おじいちゃんのあたたかい見守りがあつたからこそだと思います。

おじいちゃんは、おいしい物を知っていて、たくさん僕におしえてくれました。その中でも噛めば噛むほど味が出るシリーズ(笑)はともおいしかったです。特に、兵庫で買って、新幹線の中で食べた乾燥牛肉は絶品でした。

おじいちゃんは、いろいろ考えて、生活を快適に過ごせるようにしてくれました。はんこ入れや、コーヒーのためのミルク入れ、やかんの持つところや勝手口の電気、そして、僕の机の本棚も作ってくれました。廣田の家は知恵でいっぱいです。本当に尊敬するおじいちゃんです。

居間のドアを開くと、「おお、来たか」とあたたかくむかえてくれる安心感。それが僕にとつてのおじいちゃんです。おじいちゃん、これからも長生きして、「僕にとつてのおじいちゃん」で、いつまでも続けてください。

拓也より



神様に聞き従う

平野 博(大濠)

はじめに

「神様に聞き従う」言葉ではとても簡単な事ですが、実際、私自身がどれだけ神様に聞き従って歩んでいるのでしょうか。

今回私は、八二日間の入院生活を通して、神様から沢山の静まる時を与えられ、また、沢山の聖言を与えられました。そして「神様に聞き従う」ことよって、神様からの恵みを沢山頂きました。

現在、リハビリに週二回、整形の受診に月一回、徳洲会病院に通院しています。そして職場復帰の時を待ち望んでいます。

この間、家内の看護には本当に感謝します。また、榎本和義先生、文子先生を始め、沢山の方々のお祈りを心から感謝致します。そして、わざわざ病院までお見舞いに来て下さった兄弟姉妹の皆様にも心から感謝申し上げます。

一、事故く入院生活の始まり

二〇〇二年一月一八日(月)午前一〇時ごろ、私は会社

前の信号で赤信号で立っていました。その時突然、右方向から強い力で押し倒されました。右足首の激痛で気が付いて、周りを見ると、道路上に乗用車が横倒しとなり、信号機が傷つきワイヤーが大きく曲がっており、私は、交通事故に遭ったことに気が付きました。私の周りに沢山の人が囲み、その中の一人の男性の方が、救急車の手配から会社から人を呼んで来たりしてくれたようでした。そして、加害者の女性が半ば取り乱し、なきながら謝っていました。その時、私の口から出た言葉は、相手を責めるものではなく、相手を気使う言葉でした。「私は間もなく救急車が来るから大丈夫です。車にはあなた一人ですか」。この言葉で彼女は再び車に戻り、幼い子供を抱いて戻ってきました。やがて救急車がきて私は、徳洲会病院へと運ばれました。

ところで、この「事故」に遭う前、親との同居の話が以前より続いておりました。工務店からも見積りを貰っていて、具体的に話を進めている最中でした。この話は、神様から出た事で在ると確信して家内とともに祈り、話を一つ一つ進めていました。しかし、反面、二〇〇三年四月の新学期には「守」も「悟」も今宿の小学校へ行かせたい、そのためには、三月中には引越しを完了したいという、自分達の計画を立てていました。その時神様は「事故」という形で私に「神様に聞き従い

なさい」と示されました。「神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない」。(伝道の書三章一一節)

私は、救急車で徳洲会病院へ運び込まれ、レントゲン、CTスキャン、血圧等の検査を受けました。その結果「右足間接開放性内側副韌帯断裂」「右ひ骨遠位部骨折」と診断されました。暫くして連絡を受けた家内が病院へ駆けつけて来ました。午後一時過ぎ私は手術室へ運び込まれ、手術が始まりました。麻酔は半身麻酔で腰の骨に打られました。胸から下の感覚がなくなりましたが、首から上は、ハッキリとしており、手術室の中がわかり、手術担当医の動きがよく見えました。そして全てを神様に委ねていました。手術が終わり病室へ移された時は午後三時を過ぎていました。病室は八人部屋であったことを知ったのは、暫くたってからのことでした。手術後の私を診るために看護婦さんたちが忙しく何度も来てくれました。

私の右足は、膝までのギプスでしっかりと固定されていたので動かすことが出来ませんでした。少しずつ麻酔が切れ始め傷口の痛みが強く感じるようになって来ました。その姿を家内が心配そうな顔で見えており、私の両親と上野の兄と姉も

一緒に見舞いに来て下さっており感謝しました。私はその時「神様が私と共にいて下さるので大丈夫です。ただお祈りをお願いします」とハッキリと言うことができました。

夕食が運ばれて来ましたが、殆ど体を起こすことができず、食べるのに苦労しましたが、何とか食べる事が出来ました。午後七時ごろ家内が再び来てくれ午後八時ごろまで居てくれました。午後九時、病室の電灯が消され、長い夜が始まり、傷口の痛みが再び強くなった。看護婦さんに痛み止めの投薬をして頂き神様にお祈りをして眠りにつきました。こうして入院生活が始まりました。

二、神は愛である

入院生活が始まって数日が過ぎました。その間、神様はベツト上で動けない私を祝福してくださいました。看護婦さんたちは何度も容態を見に来てくれました。主治医の篠田先生も容態を見に来て下さいました。後で知った事ですが、私の主治医の篠田先生は他の先生と違って自分の手術した患者さん一人一人を回って容態を診ておられました。神様はいつも私と共に居て下さり、最善を成して下さいました。そんな時「神は愛である」(第一ヨハネ四章八節)の聖句が与えられました。

二度目の手術の前日、私は、ストレッチャーにてお風呂に連れて行かれました。約二週間振りのお風呂でした。そして一二月四日、骨折部位の接合手術の日となった。前回と同様、半身麻酔で手術が始まった。電動工具のモーター音がして骨折部位にプレートが取り付けられネジ五本で固定されました。手術が終わわり病室へ戻った頃には、麻酔が切れ始め、右足首に不快感があり、痛みも強かった。しかし、翌日には車椅子に乗る事を許され、トイレまでの往復をするようになりました。

週明けの一二月九日(月)からリハビリが始まった。右膝曲げと左足の筋力トレーニングでした。右膝は固まって曲がりませんでしたが、左足は一キロの重りを足首に巻いての上下運動をするのですが、これが出来なかった。リハビリの担当医は川内先生という女性の先生でしたが、この先生もリハビリ室で評判の良い先生でした。ここでも神様は一番良いことをしてくださいました。病室内ではCPMという機具での膝曲げをすることに成りました。機械に足を固定して二時間膝を曲げたり伸ばしたりの繰り返しでした。一二月一四日(土)には既に抜糸も終わって松葉杖を使つての歩行訓練が始まりました。CPMはこの日に終わりました。

さて、一二月も中旬に入り、私はクリスマスの日に何とか

教会へ行きたいと思い、神様にお祈りをしていました。そんな時私は、インフルエンザにかかり、一六日(月)から一八日(水)まで寝込んでしまいました。一九日(木)にはリハビリを再開し、二三日(月)からは、リハビリ室内を松葉杖を使つて二周を二回廻る訓練が始まりました。「いと高き者よ、あなたによつてわたしは喜びかつ楽しみ、あなたの名をほめ歌います」。(詩篇九篇二節)この頃、この聖言が与えられ、私は神様からクリスマスは病院で迎えることと示されました。

一二月二五日(水)午後二時三〇分、私は看護婦さんから「院内コンサート(病院内でのクリスマスコンサート)」へ行つて見たらと言われ、神様に祈り、そして、これは神様から出た事だと信じ出席しました。演奏者は小学一年生から六年生までの十八人のメンバーと大人が四人でした。プログラムも賛美歌を主として歌ってくれました。五十分あまりの時間でしたが、オープニングに引き続いて、賛美歌の「オーホーリーナイト」が歌われると感動を覚え、目に涙が溢れて来ました。そして、終わるまでの間、私はずっと神様に感謝していました。神様は、このコンサートを通し、私に神様の愛を示して下さいました。そして、私が救われた時の事、洗礼を受けた時の事が思い出され、私には、いつも神様が付いていて下さる、この神様が必ず歩けるようにして下さいと確信

しました。

翌日の二六日(木)には、リハビリ室内を三周を一回と一周を一回歩く訓練となり、二七日(金)には四周を二回、二八日(土)には五周を二回廻ることが出来るようになりました。神様の御業がこの身に成されたことを感謝します。そして病室のある六階とリハビリ室との往復に限って、松葉杖を使つて歩く事を許されました。また、リハビリ室での膝曲げの訓練が終了となりました。年内のリハビリが最終日となつた一二月三〇日(月)の朝はとても朝焼けが綺麗でした。「あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない」。(ローマ一三章一四節) 私は、正月を自宅で迎えたいと思う思いをまたまた、神様によつて打ち消されることとなりました。そしてリハビリでは、左足のスクワットが開始されました。また、右足の固定は夜だけとなり、昼間は取り外されるようになりました。また一歩、神様によつて良き事がこの身に起きました。

三、新たなる希望

二〇〇三年一月一日(水)は、年の始めに相応しく、朝日が眩しく病室内に射し込んでいました。そして、静まる時が与えられ、「はじめに神は天と地とを創造された」(創世記一章

一節)の聖言が与えられました。実家の改築の事、子供たちの今後の進路の事、他、沢山問題がありますが、一つ一つお祈りしながら、七日間の天地創造の中で、全てを「良し」とされた神様を信じ、神様が一番良しとされる事を待ち望みたいと思ひました。

翌日、一月二日(木)の夕方、新年の標語を知らせに家内が来てくれました。

- ① わたしの愛のうちにいなさい(ヨハネ一五章九節)
- ② 神は愛である(第一ヨハネ四章八節)
- ③ わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によつて歩いているのである

(第二コリント五章七節)

神様の御愛によつて、私はこうして生きていく事が出来る事を感じます。神様は私に「いつも一緒にいる」と声を掛けて下さいます。目には見る事が出来ない神様ですが、しかし、今も生きて共に歩んで下さる神様を感謝します。

同じ日、榎本百合子奥様の御召天の知らせを聞いた。人が死ぬと言う事はとても悲しいことです。しかし、百合子奥様は、榎本利三郎牧師先生の側で、いつもニコニコしておられ

ました。そんな百合子奥様を神様は祝福され、この世の生涯を終わらせたのだと思います。そして聖言が与えられました。「すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」。(マタイ六章四節)

一月四日(十七年年年始で休みだった)リハビリが再開した。筋力トレーニングの重りが右足二キログラム、左足二・五キログラムに増加されました。一月七日(火)には、筋力トレーニングに新しいプログラムが組まれました。「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである」。(マタイ一八章三〜五節)

そして一月一〇日(金)、右足首を固定していたネジを取り除く手術の日となりました。手術は局所麻酔で行われ、僅か二十分程で終了、そして、レントゲンの後病室に戻りました。その時には、痛みが激しくなり、神様にお祈りをしました。「この痛みを取り去って下さい。そうすれば、私は休まります」。すると、痛みは速やかに取り去られ、感謝しました。

一月一四日(火)の朝、食事を終えた後、車椅子で外へ出

てみました。深呼吸をすると、冷たい空気が体中に行き巡り、とても爽やかに成りました。病室に戻り聖書を読み次の聖言が与えられました。「まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった」。(創世記二八章一六節)この日から、リハビリが再開しました。いよいよ足首を曲げる訓練が始まりました。これが堪らなく痛い。足首の筋という筋が切れてしまうのではないかと思いました。一五日(水)には、右足に体重の三分の一(十五キロ〜二十キロ)を架けて歩く訓練が始まりました。松葉杖を使ってではありませんが、久し振りに自分の足で歩きました。とても嬉しく神様が一番良い事をして下さったと感謝しました。

一月一八日(土)には、右足に体重を架けて歩く事も随分慣れて来て、病院内の公園まで出かける事ができました。そして、二一日(火)には、看護婦さんの介助を借りての入浴が中止となり自分で入浴する事が許可になりました。さらに外出許可も頂ける事ができました。また、右足に架ける体重も二十キロ〜三五キロと増えました。二二日(木)には、右足に全体重を架ける事が出来るようになり、松葉杖も一本となりました。この日与えられた聖言は「主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである」(詩三四篇八節)です。神様は一月一四日(火)のリハビリ再開から一

週間の間に本当に沢山の御業を現して下さいました。「そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」。(マルコ一章二四節) だんだんと、退院のことが気になりだした時に、この聖言が与えられました。そして、順調に快復していく中、いつしか神様を試している私がそこに居ることを教えられ、感謝しました。

一月二六日(日)、外出することが許された私は、聖日礼拝に出かけて行きました。会堂に入り、椅子に座ると心が洗われる思いでした。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」(マタイ一六章二四節)の礼拝メッセージを頂き神様に対する姿勢を正され、感謝しました。

一月二八日(火)のリハビリで松葉杖を使わないで、自分の足だけで歩く訓練が始まりました。三〇日(木)には、全く松葉杖を使わずに歩く事が出来るようになりました。

二回目の外出が許可され、二月二日(日)教会へ出かけて行きました。この日は、松葉杖は病院に置いて行きました。

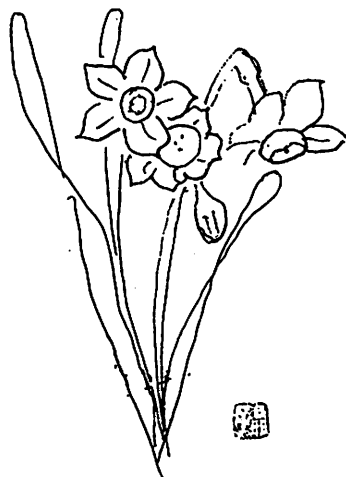
二月三日(月)の朝、私は隣のベットの人の行動が気になり、夜眠れずに頭がとても痛く、そしてとても眠かった。その時に「しかし、聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、

憎む者に親切にせよ」(ルカ六章二七節)の聖言が与えられました。この日の回診の時、主治医の篠田先生より、いつ退院しても良いと許可が出されました。そして、二月七日(金)に八二日間の長きに渡る入院生活に別れを告げ、退院する事が出来ました。しかし、リハビリはまだ続けて通院しなければならず、また、整形外科へも定期的に受診することとなりました。一月の初めの頃は、退院は早くても二月下旬頃になりますと言われていたのですが、神様は、時いたって二月七日(金)に退院の日として下さいました。

おわりに

二〇〇二年一月一八日(月)に交通事故に遭ってから二〇〇三年二月七日(金)までの入院生活で、私は神様から沢山の聖言を頂き、神様に従う事で神様の御愛を受ける事が出来ました。人間的に考えれば最悪の事も神様が最善をして下さると信じて歩ませて頂くと、必ず神様はどのような状態にあっても導き出して下さいました。家族の中でも、次男の「悟」は一時も私から離れようとしません。その姿に、私は神様に対する姿勢を見ました。これからも、一時も神様から離れる事をせず、神様だけを信じて行きたいと思えます。続けてお祈りをお願い致します。

主人の病



正野 悠子(大濠)

主人は、平成一三年一二月二三日夕方から熱を出し、風邪、インフルエンザ、肺炎と内科での診断を受けながら、症状が消えないまま一ヶ月過ぎ、一四年二月三日早朝、出血があり、救急センターへ行きますと、原因は、泌尿器系との事、近くの泌尿器科へ回されました。そこでの一ヶ月がかりの検査の

結果、前立腺癌の疑いありとのことで、国立病院の泌尿器科へ回され、生検を受けたのが、三月七日でした。その間、熱が続き、痩せていく一方でした。私は、二月初めの祈祷会でいただいた、マタイ一四章二七節「イエスはすぐに彼らに声をかけて、『しっかりとするのだ、わたしである。恐れることはない』と言われた」の聖言と、ロマ書八章三一節「神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか」との二句によりすがり、祈りながら三月一三日の結果を待ちました。その間、代診の医師からと検査した技師の方から、私にほぼ癌に間違いはないといわれていましたので、戦いでした。一三日一時頃、部長先生から呼ばれ、主人と結果を聞きました。炎症がひどく、治療を要するが、癌ではない。原因は不明、とのこと。神様の憐れみに深く感謝を捧げました。東京から、大阪から帰福した子供達と共に感謝会もしていただきました。

病み上がりの主人への配慮で、佐賀の小さな現場に四月一日付けで転勤になり、二週間目、帰宅した四月一二日夜から発熱、また欠勤して、通院しながら抗生剤の点滴を受け続けましたが、五日目には、四十度の高熱となり、解熱剤が効かず、下腹部の激痛まで伴い、緊急入院しました。入院原因は「細菌」によるものでしたので、八日目には退院できました。

でも、以前からの炎症は消えず、血液検査の数値も高く、療養を必要としまして、四ヶ月間、休職しました。主人の病のこと、先々の生活のことを考えますと、不安になり、ひたすら祈りつづけておりました。六月九日の夜、静まつております時、「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもつて、あなたをささえる」イザヤ四一章一〇節のおことばがここにひびいてきて、主が共にいて下さる確信を与えられ、心から感謝しました。

主人は、二週間毎の通院は続いていました。八月に入り、担当医から、悪性の疑いがありとのことで、再度、「生検」といわれ、八月二〇日受けることになりました。三月の生検の結果、細菌が入り、入院するという痛手を受けていますから、またあの苦しみ！と思うだけで気が重く、主人も、暗い表情で日々を過ごしておりました。検査の一週間程前のこと、急に主人の表情が明るく変わったので、驚いて尋ねますと、主の約束の聖言を待ち望んでいると、コリント人への手紙第一、六章二〇節が与えられて、うれしくなったというのです。結果は、主の聖手に委ね、主の栄光のために、用いられるという喜びに満たされました。一方、私の方は、「悪性だった

ら？」との恐れに怯えていました。丁度、その頃、一聖徒の手紙文を読んでいた中に、「病弱な自分や、自分の家族の平穩無事だけを祈らないで欲しい。それも必要ではあるが、主イエスの福音に救われ、召された者として、ふさわしい生涯を全うできるよう祈ってほしい。主のために受ける痛み、苦しみ、貧しさなどは覚悟の上です」と書かれていました。それを讀んだ時、顔が赤くなる思いでした。私が求めているのは、主人の健康回復と自らの平穩無事の生活だけだったからです。ご自分の生命を捨てて、私の罪を贖いとして下さり、天に国籍を備えて下さった主のご愛にお答えすることなど、忘れていた私でした。その週の礼拝のメッセージも、「しかし、わたしの思いのままではなく、みこころのままになさって下さい」マタイ二六章三九節をいただいたのですが、素直にお従いできない私でした。このままでは、主に申し訳なく、悔い改めのお祈りを捧げました。すると、不思議なように、「み心のままに……」とお委ねすることができるようになりました。お陰で、平安を与えられて、再検査を受けることができました。それから一週間後に、「悪性ではない」との結果をいただき、神様のあわれみの深さに、恐れおののく思いがしました。この八ヶ月間、いつも主が共にいて下さり、絶えず聖言をもつて慰め、励ましてくださいました。また、

この主人の病を機に、私の二六年間の祈りの課題でした長女が受洗へと導かれ、何と感謝して良いかわかりません。大阪で学んでおりました一男も、戻ってきまして、ご臨在への渴きを与えられ、励んでくれるようになりまして、主人の病を通し、神様は家族一人一人の魂を目覚めさせ、新しくして下さいました。

今は、ただ、残る生涯、自分を捨てて、主に従いさせていただき、主のご愛にお応えしたいと、主人共々、願ひ、祈っております。



母・筑山なおの思い出

大口 和子(前田)

私は小学五年生を終えますとき、私が当時の女学校に行けるかどうかと、母は大変心配いたしました。母のお友達にお願いしまして、九大の眼科部長先生に診察していただきまして、真つ暗な暗室で、反射鏡で照らされたので、とても怖くて泣いてしまいました。学生さんの一人の方が私を膝に乗せて、抱いてくださったのですが、怖くてなりません。そして、部長先生は母に、「この視力では、女学校へは行けません。そして、盲学校は東京にしかありません」とおっしゃったので、母はすっかり力を落としまして、途方にくれておりました。私には分からないように泣いたのではないかと思います。その明るる日に、不思議なように、福岡盲学校から男子の先生がお二人で、生徒勧誘に自宅まで訪ねて来て下さいました。「私はあんまさんになんか、なりたくない」と言つて、奥の間に逃げ込みましたが、母が「ちよつと来てごらん。とてもきれいよ」と申しますので、行つてみますと、新しい点字盤と計数器(テラー版)と言つて、大きなお盆のようなものに穴がたくさん開いていまして、わたしの小指の先を縦に半分にしたような位の小さな駒に、足す、引く、

などの印がついていまして、それがとても珍しくて、私は盲学校へ行ってみようかと思いました。母は大変喜びまして、早速転校させてくれました。でも、その家からは、電車で天神町で乗り換えまして、渡辺通り一丁目で降りて、四五分歩かなければなりませんので、母は私が学校から帰ってくるまで心配で、仕事を手につかないと申しました。そして福音の近くに家を探し出しまして、引越しました。歩いて十五分位の所です。そして、福音の校門の前の道を隔てた所に小学校がありましたので、そこに妹も転校しまして、私の護衛のように一緒に学校へ行けるようにしてくれました。

ところが、今度は教会が遠くなってしまいましたので、母が私に「教会を探しに行こう」と申しましたので、歩き回って探し回りました。人様にもお尋ねしながら、やっとナザレ教会を探し出しました。知らない方が教えてくださったからですが、会堂がなくて、信者さんのお宅で、日曜礼拝から各集会が開かれておりました。私と母が訪ねて着きましたら、大変喜んで迎えてくださいました。早速所属して、出来るだけ集会に出席させていただきました。ナザレの家族に加えていただいて、苗字を呼ばれないで、「和子さん」と名前を呼んでくださいますので、本当に兄弟姉妹という感じで、親しませていただきました。牧師先生は代わられましたけれど、

私は中学二回目の二年生のときに、間宮先生によりまして、水ではなくて、頭に油をちよつと注いで、滴礼を受けさせていただきました。

二年を二回しましたのは、私と男性の年の差があまりに激しいために、なるべく年齢の揃っているクラスに入れてくださったためです。また、友達も私を喜んで受け入れてくださいます。少しも差別を感じずに、楽しく勉強させていただきました。教科書は普通の学校と同じ内容で、それを点字で書かれてあるだけです。その他に、解剖・生理・病理・診断と、針灸・マッサージの実習で、勉強がとても忙しくて、時々徹夜をしました。でも、洗礼を受けました当時は、聖霊に満たされていきましたので、各集会の時間が近づきましたら、夜、雨が降っておりまして、行かなければいけない、じつとしていられない気持ちにさせられました。夜一人でも、電車で一時間位かかる教会へ出席いたしました。私が洗礼を受けました頃は、小さな会堂が与えられておりましたので、出来るだけ出席させていただきました。夜道を歩くのは、怖がり屋で臆病な私でしたが、主が共にいて、帰りの道も無事に導き返してくださいました。福音の制服は、母が縫ってくれていましたので、感謝で一杯でした。

当時は、小鳥馬場（こがらすばば）という町に住んでおり

まして、便利のとてもいい所でしたが、戦争のため、その辺りは皆疎開になりましたので、歩いて十五分位の所に家を探しまして、今泉町という所に引っ越しました。そして、家主

さんが「お隣の奥さんも一緒に同居するように」と言われまして、奥の六畳の間に住んでいただきました。それから、妹がお産のため、里帰りしてまいりましたので、三畳の間を貸して、そこでナザレンに属しておられました産婆さんによってお産をいたしました。男の子と女の子の双子で、母は驚いてちよつと慌てました。男の子がちよつと小さくて、お乳を吸う力がございませんでしたので、ガーゼではおづきの赤ちゃんのようなものをこしらえて、お茶のみ茶碗にミルクとかお乳を入れて、それに浸しては口に入れてあげて、段々吸うことができるようになりました。私と母はかかりつきりで洗濯物をたらいで一つ一つ洗って、井戸水ですすいで、食事の支度、お乳飲ませの手伝いと、とても忙しく手伝いました。

私は目が半盲ですけれど、買い物に行ったり、銭湯に行ったり自由にできました。妹が元気になりましたら、二人の赤ん坊を連れて、嫁ぎ先の家に帰りました時は、今度母と私が毎日朝食後徒歩で、片道一時間近い道を歩いて手伝いに参りまして、洗濯物を山ほど洗って干して、夕方母と二人で歩いて帰り、家で夕飯を食べました。二十日以上通いましたでしよ

うか、それからは妹もすっかり元気になりましたので、やつと通わなくてもいいようになりました。

ある日、雨の降る日に、当時のナザレンは植松先生でしたが、母が先生のお宅に伺いましたら、雨がポタポタ漏るのでなくて、天井が破れていたのでしょうか、家の中に雨が降っておりまして、こんなポロポロの家にお住まいになつて、と大変お気の毒に思つたようです。先生のお宅から帰りまして、先生方に家に一緒に住んでいただくようにした、と家主さんにも言わずに六人のご家族が引っ越してこられまして、三畳に奥様のお母様がお休みになり、四畳半に先生ご夫妻と三人のお子様がお休みになり、食事も四畳半で私たちは先生方と別のテーブルでしたが、同じ部屋で食事をいたしました。私と母は玄関の二畳の所で休みました。母は一、二ヶ月おつていただくつもりだったのですが、なかなか家を捜そうとはなさいませんでした。その内に、お母様はお召されになりましたけれど、私は一番下の真理子ちゃんをずっとお守りさせていただきました。

その内に、すぐ近くに住んでおられました福盲の先生がおいでになりました。音楽専門部ができましたから、ぜひ入学してください、と生徒勧誘に来られましたので、半年間の仮入学として通わせていただきました。お琴の新曲を教えてい

ただきましたが、半年で奥の手まで行くことができまして、それで音感がしつかりと身に着けられました。専門部ですから、とても厳しく特訓されました。伸びることができたのは、と感謝しております。その内に、ライトハウスにいる福盲のクラスメートからいらつしやい、と度々手紙がまいりました。その点字の手紙を母に読み聞かせましたら、盲女子ばかりのクリスチャンホームだったので、願ったり叶ったり、と大変喜びました。中津の叔母と下見にまいりまして、そこで私のことを理事長先生にお願ひして、帰ってまいりまして、私は早速荷物をまとめて入社させていただきました。家庭がクリスチャンホームだったので、特別に入社させていただきますました。

それから、四年間の天国時代を楽しく過ごさせていただきました。午前中は最初にチャペルが二十分位で、国語、社会、聖書などの勉強をいたしました。午後は一時から英語部と手芸部、針灸部にわかれまして、私たち手芸部はレース網をカタン糸の八番を使って、シヨッピングバッグや花瓶敷き、テーブルセンター、テーブルクロス、ベッドスプレッド、それはアメリカから注文を受けて、先生と友達と二人で作りました。私はまだ手ほどの段階でしたので、それは難しくて、できませんでした。そしてチャペルのオルガン伴奏は事務の

女の方が単音で弾いてましたので、私と友達とで讚美歌を両手で弾けるように、牧師先生の奥様に習いまして、二人が違う番号を練習して、弾かせていただきました。譜は全部頭の中に描きまして、正しく弾かせていただきました。

そのうちに兄たちが結婚いたしましたして、三菱化成の大畑社宅に住まわせていただくことができましたので、母と、私は、植松先生より先に黒崎へ引越してまいりました。何も知らずに越してまいりましたのですが、前田町に榎本先生方がおられるから、連れて行こうと私に母がうれしそうに申しましたので、ついてまいりまして、何年ぶりかにお目にかかることができました。先生ご夫妻も大変喜び迎えてくださいました。早速、所属させていただきました。神様は不思議なことをしてくださったと、感謝せずにはおられません。社宅は庭にものが植えられるくらい広く、にわとりも飼いました。ある日のこと、わがままでごうまんな私は母と二人きりになりましたとき、母に私をなぜ産んでくれたのですかと当り散らしまして、母を泣かせてしまいました。その次の日でしたか、母はヨハネ伝九章の一―三節までを読んでくれました。

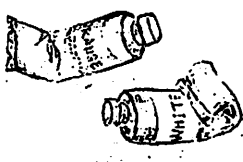
私はみわざがあらわれるということが全くわかりませんでした。それからどれくらい経ちましたか、覚えていませんが、榎本先生の牧師館に三日間預かっていただきました。食事の

食器洗い、洗濯など手伝わせていただきました。先生はゆずぎのとき、ポンプを早く突いて水をくんでくださったり、干すときはたかい竿に干してくださいました。六人家族の洗濯は山ほどございましたけれど、先生ご夫妻はとてもやさしく教え導いてくださいました。三日目には親知らずが横向きに生えてきて、すごく痛みまして、とうとう帰らせていただきます。

それから母はだんだん年老いていきますため、兄たちにずっとお世話になるわけにはまいりませんので、結婚したいと思ひまして、もし外傷のため、失明された方がおられましたらと思っております。すると榎本先生が大口を紹介してくださいだったので、結婚させていただきました。そのころ、お料理も何もできませんでした私の結婚に母たちは賛成ではありませんでした。けれど、神様は私の願いどおりに、結婚させてくださいました。

それからがずっと大変な試練の中を通らせられまして、また母に心配をかけてしまいました。私たちは住み込みの職人生活を三年もしましたでしょうか、やっと二万円をためまして、主人が八幡にかえろうと申しますので、年金病院のすぐ上に四畳半一間の家を二千円でかして頂きまして、前田教会の日曜学校、礼拝に出席させていただきました。力を保育園

に預けて、主人と私は別のところに、職人として通院させていただきますました。それから力が三歳の頃でしたでしょうか、母が須磨の病院に入院してしまいましたので、力を連れて、二人で見舞いにまいりました。それから家に帰ってまいりまして、何ヶ月経ちましたでしょうか、母の召天の通知を受け取りましてからは、トイレにいつても、バスに乗つても、涙が乾きませんでした。公衆電話で榎本先生に泣けて泣けて涙がかわきませんとお電話いたしましたら、すぐいらつしやいとおっしゃられましたので、バスでかけつけまして、牧師館におじやまさせていただきました。先生がお母さんは今、天国で金の冠を授かつて、大変喜んでおられます。ですから、あまり泣くとお母さんの後ろ髪を引張つて、地上に引きずり下ろすことになりまして、あまり泣いてはいけませんよとやさしくおっしゃってくださいました。それから、おかげさまで、涙がかわき、仕事に励むことができるようになりました。つたないお証を終わらせていただきます。



トルコ旅行記(パウロの足跡を辿って)

正野 真宏(前田)

私達夫婦は、平成一四年一〇月一五日から十日間、トルコへ旅行する機会を得た。トルコは私達日本人とはあまり馴染みのない国であるが、聖書とは切っても切れない国である。特に使徒行伝に出て来る教会の地名は今も残っている。そういうこともあって、一度は訪れて見たい国であった。

トルコはアジアの西端に位置し、ヨーロッパと接している関係から、昔から東洋文化と西洋文化の融合する国であると同時に、キリスト教国に支配され、イスラム教国から攻められると言う激動の歴史を持っている。古い時代はインド方面のヒッタイト人が占領して黒海付近で王国を建国したが、地中海付近では、隣国ギリシャとの覇権争いがあり、トロイの戦争が有名である(トロイの遺跡も見せてもらった)。文化的にはギリシャ文化圏で、ギリシャ神話の発祥の地となっており、ギリシャの神々はここに住んでいたと言うことである。その後、アレキサンダー大王の東方遠征で征服され、イエス様が生まれる少し前にローマに占領されて、ユダヤの国と共にローマの属国となった。ローマ帝国の衰退後は、東ローマ

(後にビザンチン帝国)の支配下にあり、キリスト教は保護されていたが、十一世紀頃からイスラム教国が勢力を増し、十三世紀にビザンチン帝国は崩壊してオスマントルコが建国した。ここでイスラム教が国教となり、キリスト教を信じていたギリシャ人達は追放され、キリスト教は衰退して行く。オスマントルコはアフリカ、ヨーロッパ奥地まで進出し、一大帝国を形成したが、第一次世界大戦で領土を削られ、後に共和制となつて、今のトルコ共和国となつている。

トルコの国土は日本の倍あるが、人口は約半分しかない。トルコ東部は山岳部も多いが(イラクとの国境にアララテ山があるそうだ)、私達が観光した西部地域は、高い山は少なく、小高い山の上まで畑となつている。

九九%がイスラム教であるが、西洋文化の影響もあって、穏健的で戒律はそれほど厳しくはないと聞いた。それでも一日五回の祈りの時間になると、教典朗読のあの独特のメロデーの放送が流れてくる。イスタンブールなどの都会ではほとんど見かけないが、地方ではかすさを被った黒の服を着ている女性が多い。顔写真を撮つてはいけないそうである。

私達のツアーは、「東西文明の十字路トルコまるごと周遊十日」と銘打つて、ギリシャ文化やローマ時代の遺跡、イスラム教の寺院(モスク)、世界遺産となつているバムツカレの石灰

棚やカツパドキヤ(使徒行伝二・九、第一ペテロ一・二では「カバドキヤ」の奇岩群など盛り沢山の内容で楽しませてくれるが、私は折角の機会であるので、使徒行伝に記されたパウロの足跡に少しでも迫りたいと思った(パウロの出生地タルソもトルコにある)。残念ながら、それが目的のツアーではなく、またガイドさんもイスラム教徒の現地の人であるから、聖書の世界にはほとんどふれることがなかったが、以下、私なりに感じたことを記したいと思う。

トルコ地図を開いて見ると、ヨハネの黙示録に出てくる七つの教会が隣接するようにエーゲ海側に点在する。バスで通った所ではベルガモ、イズミール(スミルナ)、エフェソス(エペソ)、ラオデキヤであり、近くにはテアテラ、サルデス、フィラデルフィアがある。七つの教会ではないが、ラオデキヤの近くにはコロサイもある。このほか、トルコ中央部にあってシルクロードの十字路と言われたコンヤ(イコニオム)にも立ち寄ったが、いずれもパウロ時代の遺跡どころかその気配さえもない。

そういう中で一番印象に残ったのが、エフェソスである。エフェソスは中国から延々と続くシルクロードの終点となった所で、ここから船で荷物を積み出してローマに送った要所

である。当時は政治、商業貿易、宗教上の重要都市で、パウロも、ヨハネも何度も訪れている。ヨハネが幽閉されたパトモス島はここからすぐ近くである。伝説では、イエス様の母マリヤもヨハネと共にこの地に数年住んだとのこと、後に立てた住居が聖マリヤ教会となつて残されている。それが近くの山の頂上に建つていて、そこにも案内されたが、なぜマリヤがこんな山奥に住居を構えたのか、非常な疑問を持った。罪な世俗を離れると言う必要はあつても、イエス様はその只中に入つて伝道されたのである。マリヤがそこから逃れると言ふことがあるだろうか。隠遁好きな後世のカトリック信者がそのように伝えたのではないかと思つた。

さて、エフェソスであるが、今は人が住んではいない。パウロの時代から何世紀後、港が土砂で埋まつて使えなくなつたので、七キロ先に移設されたため、この街は廃墟となり、今は遺跡を残すだけとなつた。その遺跡も最近になつて発掘されたとのこと。しかも発掘したドイツ人学者がそのほとんどをドイツに運んだので、余り残っていない。有名なアルテミス神殿の建物もベルリン博物館で見られないそうである。隆盛を誇つたアルテミス神殿の跡地(柱一本しか残っていない)に立つと、人間の作つた物のはかなさを思わざるを得ない。当時二五万人が住んでいた大きな街であるから、ポンペ

イの遺跡に匹敵する規模と思つていたら、まだ開発が一部と
いうこともあるが、案外小さかった。それに港町と言うので、
平坦な町並みを想像していたが、長崎のような坂道だらけの
街である。石畳の道の両側に、役所や図書館のほか浴場、遊
興場などの建物(ほとんど柱だけであるが)が建ち並んでいる
(写真参照)。ローマ時代にタイムスリップしたような気分にな
る。この道を何度もパウロやヨハネが通つたのだらうと思
うと、たまらなく親しく思える。パウロはここで三年間滞在
したが、アルテミス信仰の本拠地での伝道は困難を極めただ
ろうな。銀細工人デメテリオから迫害された所はどこだろう
か。パウロにとって、エペソはエルサレムへ帰る途中でわざ
わざ教会の役員を呼び寄せ決別の挨拶をしたり、後に「エペソ
人への手紙」を出すなど、特別思い入れの多い教会だつたと思
う。その教会も、今は何も残っていない。比較的近い町で昼
食を取つたが、すぐ後ろの丘に聖ヨハネ教会の跡地があると
聞いて行って見た。わずかに、それらしき石を見るだけで、
放置されているようで悲しかった。

パウロとヨハネが心血を注いで建てた教会は、何一つ残さ
れていない。いや、建物はどうでもいい、イスラム教に支配
されて、キリスト教が駆逐されている。パウロの信仰の足跡
が何処にもないことが残念でならない。神様はどうしてパウ

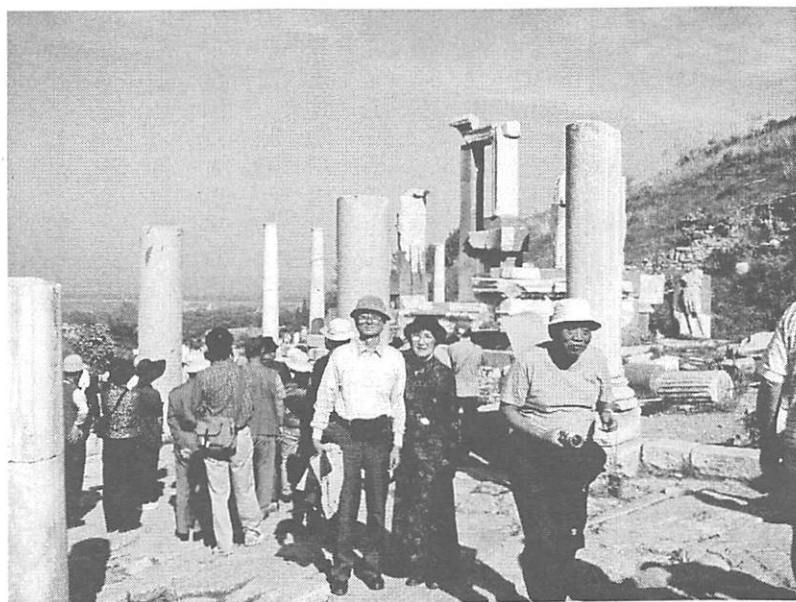
ロの労苦を無にされたのだろう。そんな思いになった。

しかし、次に立ち寄つたコンヤ(イコニウム)でその答え
を見たような気がした。ここはイスラム教に最も熱心な地で、
イスラム教の博物館がある。その中には高僧と言われた人の
お棺や、教祖マホメットの遺髪(箱に入って見えなかった)が
安置されており、それを皆が拝んでいた。私はふと思った。
もしパウロの何かが残つていたら、恐らく人々はこれを神と
して拝み、真の信仰から離れてしまふに違いない。信仰は形
ではない。神は御言を残して下さつた。しかも聖霊を注いで、
神を明らかにして下さつていてではないか。これで十分なの
である。人は印を求めるが、これ以上に何が必要だろうか。
イスラム教ではメッカ巡礼が義務付けられているが、私達に
は聖地巡礼も遺跡も必要ではない。聖霊によつて、直接主と
お会いすることができる。これぞ神の恵み、まことに福音で
はないかと思つた。

エフェソスから石灰棚があるバムツカレを経て、内陸部の
コンヤへ向う。さえぎる物もない見渡す限りの大平原に、シ
ルクロードが延々と続く。しかも道路は一直線で、地平線の
かなたまで見渡せる。パウロは二本の足でこの道を歩いて行
つたのかと思うと、胸が熱くなつた。内陸部の冬は寒く、夏

は暑いのだそうだ。今私達は冷房の効いたバスで楽々で行っているが、パウロは一步一步足を踏みしめながら、この気の遠くなるような距離を、ただ福音を伝えるために歩いてくれたのだ。「幾たびも旅をし、川の難、盗賊の難、同国民の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、しばしば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともあった」(第二コリント一・二六―二七)。道中がどんなに大変だったことか、それが実感できる思いがした。所々に隊商のための宿所が残っている。パウロもここで疲れを癒したのだろうか。

この広い大地に身を置いて見ると、人間が如何に小さな存在であることかを感じる。パウロもここを歩きながら、そう感じたのではないか。そして、まだ見ぬ世界に不安を抱いたと思う。しかし、彼が残した足跡は、何と大きなものだったことか。今やこのトルコを超えて、全世界に伝えられたのだ。それはパウロのここでの小さな一歩から始まっている。そう思うと、パウロの労苦に対する有り難さと、これを導かれた神の大きいなる恵みに感謝の念で一杯になった。



我が思い出（移動編三）

鈴木 一幹（前田）

「前号までのあらすじ」

満州（現中国）の関東軍に入隊していた私は、所属する師団に動員令（戦地に出動する命令）が発令され、当部隊全員が南方に移動することになり、満州の牡丹江省東寧県大城子の野砲連隊を出発し、韓国の釜山港から軍用船で門司港に到着、同港で大型軍用船に乗り換え、二月下旬、^{そぞろ}雲の降りしきる中、門司港を出発しました。船内は鶏小屋同然の狭さで、約二千人の兵達が高さ一、五米の五階建の棧敷が設けられ、その中に各隊毎に収容されていました。甲板上下では各中隊から派遣された数名の兵達が、中隊毎に対潜監視を命ぜられ、鹿児島沖に到達した夜九時頃船団の内の当船の右隣りの船が、突然敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、撃沈され、次は我が船の番だと、同乗兵一同、生きた心地もなく、心配していたが、幸いにも無事甲板上で一夜が明けました。

一、食事当番

昨夜の九時の人員点呼時、佐藤班長殿より、明日の食

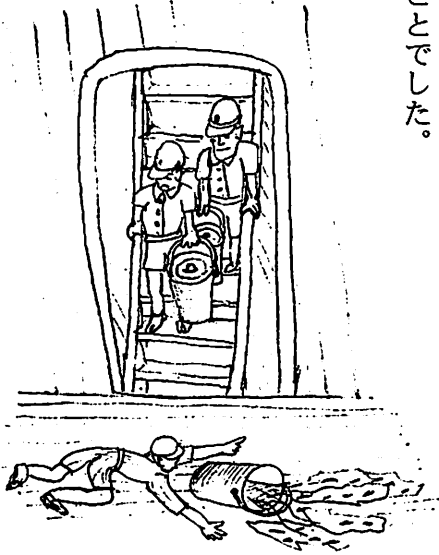
事当番を命ぜられ、戦友の川上君と二人で第四班（約五十名）の食事の世話をすることになりました。

昨夜から強風となり海が大荒となっていたため、今朝も船がかなり揺れていました。中隊の週番上等兵殿の「各班の食事当番兵は甲板の炊事場前に集合」の号令で、第四中隊の当番兵八名は一勢に走って階段を登って甲板上に集合しました。船が大きく前後左右に揺れるので、じつと立っていることが出来ず、柱やロープにすがって足をふん張り、各自動かぬようにしていました。川上君と二人で食缶（大形アルミのバケツ）四個（飯缶一、肉ジヤガ缶二、味噌汁缶一）を階下の棧敷の自班まで運ばねばなりません。川上君の体力から考えて、彼に味噌汁缶を運んでもらうことはむづかしく、ましてや一度に一人が二缶運ぶことは到底不可能でした。

また食缶を持って階段を降りる時、船の揺れで、階段が垂直に立ったり、横になったりするので、その都度片手で手摺をつかまえ、片手で食缶をぶら下げて階段が横になった時、一斉に運び、垂直になった時は、しばらく、じつとして要領が要り、万一片手で持った食缶を取り落とせば、味噌汁は全部こぼれ、大変な事になると思ひ、川上君には一回目は飯缶を、二回目は肉ジヤガ缶を

持つてもらい、私は初めに味噌汁缶、二回目は肉ジャガ缶を運びました。私は満州の部隊で勤務中、凍傷で右手の人差指・中指・薬指の三本を先端の第一関節部分から切断手術することになっていましたが、動員令が出て、手術が延期され、赴任地に到着後再診断すると言われて、移動中は自分で受領の薬で治療していました。

零下三十度位の満州での環境から南方に移動するに従い、凍傷の指先から自然に膿が噴出し、自分で付替え治療の結果、ローソク色の指先が下から赤みが差して来ました。しかしまだ指先に力が入りませんでした。しかし、どうにか無事に食缶を運び終えました。他班では階段を下りる時に味噌汁をとり落とし、汁が全部缶からこぼれたため、その班では朝食は飯と肉ジャガのみで味噌汁は無かったとのことでした。

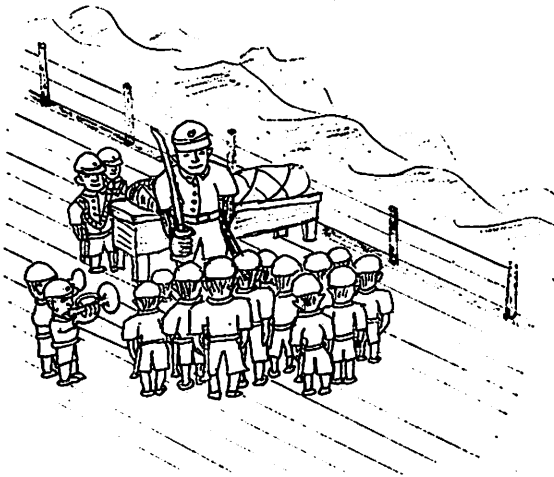


二、船上での水葬

我が中隊の第一班の兵の中で、乗船前から体調が悪く、軍医が治療に当たっていた兵（上等兵）が乗船三日目に治療の甲斐もなく病死しました。午後二時から船上甲板で水葬をするとのことで、中隊全員（約二百名）が甲板上に整列し、中隊長殿より挨拶があり、兵の中から指名された僧侶二人が読経をし、葬儀が始まりました。

遺体は毛布と敷布に包まれ、これに石灰を入れた袋をソープで縛り付け「重し」にしてありました。読経が終り、前田中隊長殿は抜刀し、号令をかけました。英霊に敬礼「捧げ銃」と声を発しました。ラッパ兵

二人が最敬礼のラッパを吹き鳴らし、宮崎少尉殿が合図し、甲板上に設けられた祭壇を海面に向けて斜めに、かたむけ、遺体を縛ってあった縄を軍刀で切断しました。遺体は板の上を海面に向ってすべり落ちて行きました。



全員はしばらく黙祷しました。目を開けて海面を見ると遺体は静かに波間に浮いて船の進行とは逆方向に流れながら静かに沈んで行きました。

三、食品倉庫の衛兵勤務

朝の点呼後、食品倉庫の衛兵勤務を命ぜられ、私は午前八時から午後四時まで、川上君が私の次の午後四時から午後一二時まで、石田二等兵が午後一二時から午前八時までとなっていました。中村兵長殿の引率で、船内第二槽の倉庫前に到着しました。前任の第二班、早川二等兵と交代し、衛兵の腕章をもらい直ちに左腕にはめ、勤務に就きました。当倉庫の入り口はドアは無く、通路から倉庫内は、まる見え状態でした。倉庫に収容されている品物は、缶詰類で、各れも木箱入りで、品名員数表に記してある一覧表を見ると、牛缶、サバ缶、イワシ缶、サケ缶等、他に米俵・パン粉袋等で、これ等の木箱が、ぎっしり積み上げられていました。

倉庫前の通路は狭く、従つて倉庫内に立哨りつしやうしていません。通路からは立哨兵は直接見え、倉庫内に入つて来て、やっと歩哨が立っているのが判る状態でした。

手近にある箱は牛缶の箱でしたが、よく見ると、手前

に置かれた箱は、蓋が少し浮き上り、蓋をとめてある釘も抜けているようでした。私は思わず蓋を持ち上げて見ると、案に開き、中の缶詰の様子が良く判りました。中を覗くと牛缶が半分位になっており誰かが盗んで持ち出したのだなと思いました。立哨して中から通路の方を見ていると、時々他部隊の兵達が通り過ぎるのを見ました。歩兵隊の兵が多く、その他工兵隊、輜重隊しゆちやうたいの兵隊も時々通行するようでした。

丁度一一時頃、四十才位の歩兵隊の一等兵(二つ星)が急に缶の箱に近づき、少し蓋を持ち上げ、蓋のすき間から右手を差し込み、牛缶を一個つかみだし、右ポケットにねじ込もうとしていました。私は横後側から、大声で「一寸待て、貴様は誰の許可を得て入つて来たか、その牛缶を返しなさい」と言うと言つて相手はびっくりして私を見ました。私は二等兵で相手の方が一階級上でしたが、私は衛兵であり、任務上問題は無いと思ひ、牛缶を取り上げ、「貴様の部隊名と名前を言いなさい」と命じました。相手は急に弱つた態度で「私が悪うございました。ほんとは申し訳ありません。出来心です、二度としませんので、どうかかんべんして下さい」と頭を何度も下げました。私は相手が年配でもあるし、今度は許すことにし、

もう二度とせぬ様に言つて許しました。相手は「申し訳ありませんでした」と何度も頭を下げて立去りました。

一二時過ぎには当班の食事当番兵が持参の飯盒入りのカレーライスを食べ、午後は異状のないまま過し、午後四時になり、当班の上野上等兵の引率で川上君が交代員として来ました。私は上野上等兵殿に「衛兵勤務に異状ありません」と申し上げ、衛兵の腕章を川上君に渡し敬礼すると、「ご苦勞でした」と言われ、やれやれこれで自分の班に帰れると思つていると、上野上等兵殿が「一寸と待て」と言つて、正面の牛缶の箱蓋を持ち上げ、牛缶一個をつかみ出し、自分の右ポケットに入れ、

「二人共、だまつておれよ、良いな」と言つて、私を連れて倉庫前を立ち去りました。



四、船内盗人化えの恐怖

① 非常用携帯食

門司港で輸送船に乗船時、全兵員に対し一人当り三食分の乾パン（一袋は網袋に小形の乾パン約四十個で中に金平糖入り）が配布されました。これは非常食として、師団長閣下の許可が無ければ、絶対食べてはならぬと言はれ、各自は、それぞれの背負袋に入れ、大切に所持していたのですが、出発後三日目頃から、朝起床後、枕代りにしていた背負袋が少し小さくなつていのに気付き、袋の口を開け、中身の乾パンを調べたところ、乾パン袋三袋あつたのが二袋になつており、一袋が無くなつていました。川上君は二袋無くなつており、他の兵達もほとんど一袋か二袋無くなつていました。

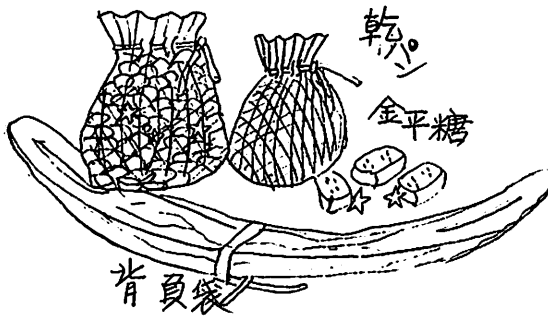
真夜中に熟睡中に誰かが盗んだのだろう、「全く困つたなあ！」と被害に逢つた兵達は悔やんでいました。

その様子を見ていた馬屋廻番の坂田上等兵殿が「おいお前等、盗まれた乾パン袋は全部で何袋になるか。」と尋ね、盗られた者が手を上げ、一袋・二袋と数えてみると総不足数は約三五袋になりました。

翌朝の朝食後、坂田上等殿が、馬糧袋を背負つて棧敷に帰つて来ました。「おい、昨日乾パンを盗られた者は、

この袋の中に乾パンが四十袋入っているから、各自不足分を補充しとけ。」と言って袋を置いて、再び馬舎に帰って行きました。盗られた者は不足分を補充できて一同ほっとしました。

後から聞いた話では、坂田上等兵は真夜中に他の馬舎当番兵と共に歩兵部隊の棧敷に忍び込み熟睡中の兵の枕にしてある背負袋を盗み出し、これを馬舎に持ち帰り馬糧袋に入れて、朝まで隠しておいたとのことでした。



②二重飯盒調達

我が砲兵隊の各兵に貸与されていた飯盒は、すべて一重の飯盒でしたので、野外演習時や、外泊訓練時に自炊

することもあり。この場合、一重飯盒だと炊飯に使うと味噌汁や副食の煮焚には他の兵の飯盒を借りるか、共同で使用するかしなくてはならず、非常に不便を感じていました。

我々の棧敷の向い側の歩兵隊の居場所となっており、甲板から各階棧敷前を経て船底まで、魚網梯子がぶら下がっており、歩兵隊棧敷前に釣り下がっている魚網梯子に歩兵隊員の人数分の二重飯盒が約二十個分づつ、束ねたものが十ヶ所位に分けて、ロープで縛り付けられていました。

入隊前に建設会社で鷹職とみやをしていたという上野上等兵殿が「鈴木二等兵、今夜一時頃おれについて来い、おれが先に門魚網を登り、飯盒を釣り下げているロープを持って甲板上まで駆け登るのだ、できるか」と言われました。

私は盗むことは、とても出来ないと思ったので、とつさに「上野上等兵殿、鈴木は昨日食事当番の時、船が大揺れで階段を下るときすべって尻もちをついて、今腰を痛めておりますので、ごかんべん下さい。」と言いました。上野上等兵殿は「そうか仕方がないな、では川上二等兵、貴様はどうか、おれに付いて来い。よいな」と言われま

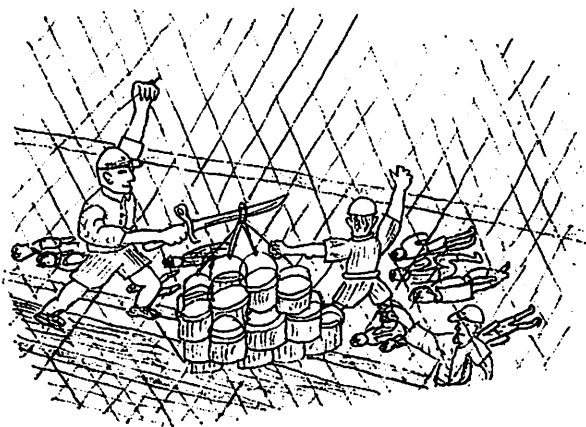
した。川上二等兵は、しぶしぶ「はい、やってみます」と返事をしました。

それ以来、川上君も私も夜九時の消灯時間後も眠れぬまま一時となりました。上野上等兵殿は身支度みじたくを整え、川上君を連れて、静かに我が隊の棧敷を出ました。私はじつと行先を見守っていました。歩兵隊にも不寝番が居るので、これに見付かると大変なことになるのではないかと、はらはらして観ていました。

二人は船内の階段を降りて一度船底の馬舎に行き、そこまで垂れ下っている魚網の最下部から真上の歩兵棧敷を目指して登りはじめました。私は、どうなることかと、まばたきもせずに、じつと見守っていました。

歩兵隊の不寝番にもまだ見付からぬまま、飯盒の釣り下っている場所に到着しました。上野上等兵殿は右手で腰のゴボウ剣を抜きロープを切りました。そのとき川上君がしたから左手で、飯盒を結んであるロープを握って引張ったとき、カラン、カランと金属製の音がして棧敷内に居た不寝番の兵が気付く「誰か」と大声で走って出て来て、川上君の右足先をつかまえました。川上君は右足先を振り切るべく、バタバタと動かししている内に左手でつかんでいた飯盒を取り落とし、飯盒は馬舎の馬糧用乾

燥かぶわらを被せて隠しました。川上君は不寝番につかまれた足先の地下足袋が抜け落ちたため、不寝番の手がはずれ、上野上等兵共々魚網を登り無事のがれた様子で、これを見ていた私をはじめ同班の兵達は、つかまらなくて良かったなあ、とほっとしました。しばらくして、川上君と上野上等兵殿が帰って来て、「一時はどうなることかと肝をつぶす心地でしたが、助かって良かった」と言っていました。ほっとして皆一斉に眠りに着きました。私は次のように神様に「いつもお守り下さり感謝いたします。今日は、上官の命令とは言え窃盗はしたくありませんので、腰が痛むと、うそをついてお断りしましたことをお許し下さい」とお祈りしました。



③軍刀の調達

我が中隊所屬の下士官は伍長から曹長まで約十人皆一般兵同様「ゴボウ剣を腰に下げていますが、動員令が出て、戦地に出発の場合は下士官も軍刀の使用が認められていました。丁度、当中隊の棧敷の一つ上の段の棧敷の一面に、どの部隊にも所屬していない、内地から台湾の現地部隊に赴任する見習士官だけの約二十名の一団で、彼等の服装は、すべて新品で、軍刀も内地で揃えた見事な新品揃いでした。

彼等の棧敷前をたまに通りがかる時等、横の手摺に立派な軍刀が無造作に立て掛けてあり、我々は目を見張って通り過ぎる有様でした。夜の点呼の後、右兵達が何かこそこそ相談話をしていました。夜中の一二時頃、下士官が一人、船底の砲軍の方に先に下りて行き、その後又一人、今度は魚網を伝つて真上の見習士官の棧敷の方の上って行きました。

私は何事かな、と棧敷から魚網の方をじっと見つめていました。川上君や他にも数人の兵が眠ってはいませんでした。

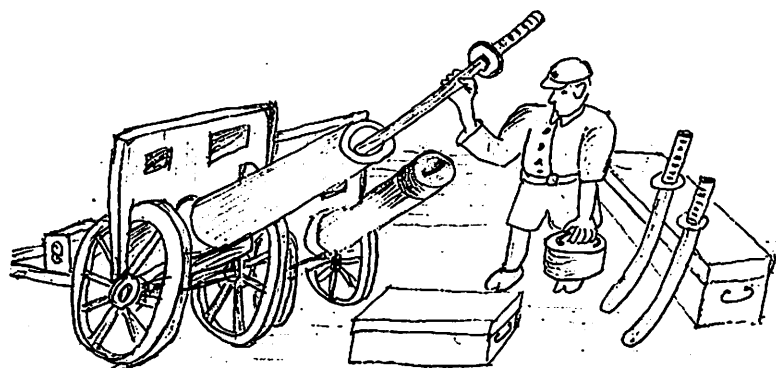
しばらくして驚いたこと以上の棧敷の端から軍刀が一本、船底の砲軍の方に落下したではありませんか。その

内又一本と次々に四、五本は落ちたと思ひました。

先に船底の砲軍の所に行つた兵が落下した軍刀を受け取り、十糎榴弾砲の砲口の蓋（皮製）をはずし、砲身に軍刀を一本押し込み、蓋をかぶせ、更に落ちて来た軍刀を次の砲口に押し込む等して、四、五本は隠したのではないかと思われ、唯々啞然とし、恐さを感じました。翌

朝刀が無くなつているのに気付いた見習士官が軍刀を探し回つていましたが、砲が置かれている所には他部隊の兵は一切立ち入ることは許されず、到底見つけることはできぬだろうし、実に気の毒だなあと思ひました。

船内で調達した飯盒や軍刀は、船が入港し、下船の際は、大砲や馬糧と一緒に



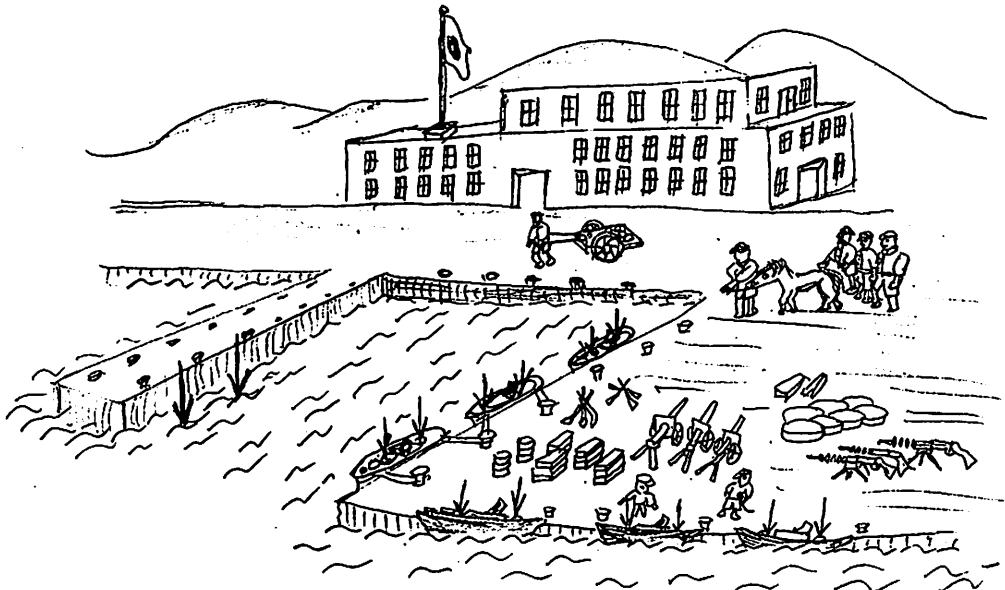
船から搬出され、他部隊には全く判らずじまいでした。

五、台湾基隆港入港

船は門司港を出港してから五日目の朝八時頃基隆港に入港しました。昨日は晴だったのに今日は早朝から小雨が降り、一月ではあるのに気温も比較的暖かく、半袖・半ズボンの服装でも全く寒くなく、門司港を出港する時は曇みぞれが降っていて、あの時の寒さは夢の様でした。ここ基隆は年中の降雨日数は年間日数の三分の二とのことで、はじめじめした感じで、我々は船内地下足袋を履いているので、雨で濡れ梅雨のような気分の悪さを感じていました。

船が静かに接岸する時、左側の岸壁の近くで、商船が一艘沈没しているのを見ました。船のマストが二本海面上に突き出たままになっていました。多分港で接岸中に米軍の空襲を受け、沈没したものでしょう。空襲の激しさが想像されました。

(以下次号)



御言葉

緒方 とみ子(大濠)

「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。ルカ二三章四三節

この御言葉をいただいた時とても嬉しかった。榎本先生が眩しくて声がかげられない。そんな時代(一九八〇年九月五日)が、私にもありました。そして榎本利三郎先生が私に聖書を手渡す時、笑って「以前ある方に自分が恵まれた御言葉を書いたら、随分立腹されたから」とおっしゃって、その御言葉を教えて下さったが、私も思わず笑ってしまった。

引照つき聖書を見るたびに思い出す二つの御言葉。

「愛の中にいるものは、神もかれにいます」。

この御言葉は、私が主人より十数年前に受洗した時に、正野員子姉より戴きました。その時は、どこの箇所にあるのか、どんな意味なのか、ちつともわからず、とにかく「あげるから、いただく」という、今から思えば、申し訳のない私の信仰です。この御言葉の横には、私と主人の受洗写真がはって

あり、客人が「その写真は…」とよく聞いたものです。

そして得意になって、信仰の話をしたのですが、長らく友達でいる人もあれば、離れてしまった人もいるけど、その時を生かすことにしています。これも、主の恵みの一つだと感謝しつつ…。

「試練を耐え忍ぶ人は、さいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう」。(ヤコブ一章一二節) (八幡前田教会礼拝メッセージ)

私の父、そして二人の姪、おまけに私は、近所にいて、随分と野村先生に習字でお世話になりました。北野に来てからも、私は先生がお忙しい身だと知りながらも、家庭の事で祈っていたきました。そして、いつも先生は礼拝メッセージ付の便りを下さり感謝でした。そして最近私も先生の真似をして見たいと祈って、筆を握るようになりました。

「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」。(詩篇一六篇八節)

この御言葉は一九八四年二月に四国の脇町兄弟教会にいる大前桂子姉からいただきました。大前姉とは、実姉以上によくしていただき、主人とよく感謝しました。一九八三年六月に九州聖会が福岡大濠公園教会でおこなわれた時に会いましました。小学校に上がる前位の小さな男の子を連れて来ていて、私が写真を撮って上げたのが文通を始めたきっかけです。

あれから随分経ちますが、本当に不思議な縁です。小さな男の子は成人を迎え、今では主を畏れる者になっていて、家族全員が救われたと聞いています。私も便りでその事を知り、神様に感謝しました。

「わが義人は、信仰によって生きる。」（ヘブル一〇章三八節）

この御言葉は野村末義先生から、色紙に書いて戴いたのは、主人が受洗した時です。あの時は本当に嬉しそうで、八幡や戸畑の教会を仕事帰りに寄ってみたい（残念ながら道幅が狭くてトラックは止められない）と燃えていた。そんな姿もあったと、しみじみ思い出す秋の十五夜。

「わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである」。（ローマ一四章八節）

この御言葉を二〇〇二年九月の家族会の時にいただきました。そして、今年（二〇〇二年）も一二月には二人の召天日が来ます。

父（一九〇五・一九七七年）が力強く書いてくれた文字に「救主福音」というのがありました。主人（一九四二・二〇〇〇年）も私に書き残してくれましたが、二人とも人の手をわずらわす事なく一人で静かに天に帰国しました。

そして父も主人も、問題多き家庭を残しましたが、祈りを受けついで私はいつも恵まれています。そして主が共にいて守って下さり、御言葉で生かされている事を覚え、日々、感謝しています。これからも、主に従っていききたいと祈っています。

ツバキ





2003年 1 月 12日

福岡大濠公園教会



2003年 1 月 1日

八幡前田教会(1)



2003年 1 月 1 日

八幡前田教会 (2)



2003年 1 月 1 日

八幡前田教会 (3)



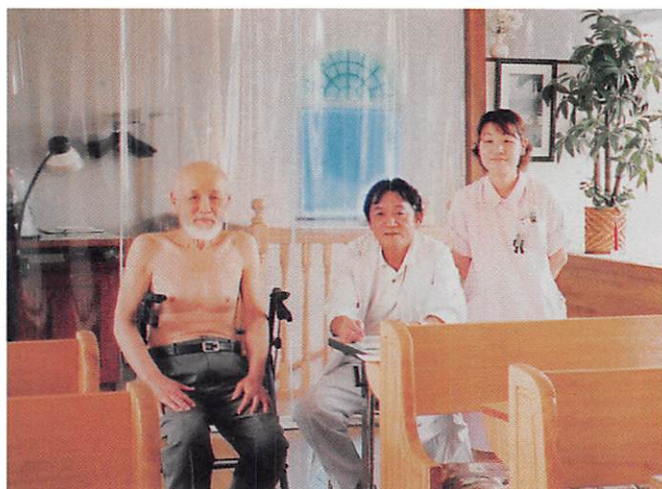
2002年12月22日

クリスマス



2002年某

記念会



2002年

在宅介護支援



2002年某月某日

お掃除会

編集後記

◎『ぶどうの木』第三〇号をお届けします。

◎「わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ること求めよう。主はあしたの光のように、必ず現れいで、冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される」。

(ホセア六章三節)

◎発行が遅くなり、すみませんでした。

◎今後も、お証、カットなど、随時募集しております。

発行 二〇〇三年一〇月

発行者 福岡市中央区鳥飼二・二・二六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本 和義

発行所 基督伝道隊

八幡前田教会

福岡大濠公園教会

戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社